

槐

かい

岡井省二創刊

平成20年10月号

平成二十年十月一日発行 第十八巻第十号 通巻第一〇八号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



神鏡

高橋将夫

蜘蛛の巣の張りつめてゐるやはらかさ
まくは瓜つかみどころの無かりけり
大鯰口をへの字に結びをる
羽抜鳥まだまだあきらめてをらず

一輪のダリアの映る磨き石
中央を占めて蜘蛛の囿完成す
好きなことできる幸せ水中花
父の日の外出予定妻に聞く
火の消えてとまどつてゐる火取虫
下界から風来るお花畑かな
神鏡の曇り晴れたる山開

槐安集

水野恒彦

文芸は遙かはるかよ白上布
硯洗ふ水ざふさぶと溢れしめ
麻蚊帳に昭和の闇は夜も青き
泳ぎ終へし青年に脂泛く
夏果ての母にこくりと夜が来る

延広禎一

山繭の緑の雫 大師堂
惟光これみつの肩にしだるる夕顔の花
惟光は光源氏の従者
まぐはひの光を魚鼓に夕螢
凌霄の群れて魔笛の聞えきし
瑞雲や天の逆鉾炎気吐く



加藤みき

八月潮管つながりて生き物よ
新棚や後に知りたる強き人
いなつるび灰色に浮く大都会
初風や煮物の匂ふ暮つ方
盆東風や出番待ちをる海坊主

石脇みはる

天牛の七つの星を開きけり
炎天に槌や鉦の音高し
わらべうたうたふ玉解く芭蕉かな
上海に向したり雲の峰
炎帝や鉄砲水のかめめのと

中島陽華

白南風や袋破れし醬油豆
一本の葦に押されしうつろ舟
葛城に通る雨あり墓
白き齒のかつぐ天草俵かな
移り香のココ・シヤネルなり聖書読む

栗栖恵通子

夏蒲団肋骨冥くありにける
口開けて夢を見てをり生身魂
考ちの声知らず入りゆく夏野かな
水門のギリギリ上る蝮草
雷鳴の彼方見てをり大首絵

竹内悦子

竹皮を脱ぐ碁敵は美少年
おしなべて極楽浄土水や蠶ご生るる
梅町の木戸に猫をる水無月会
くくり猿の五つの赤や冷奴
結納や雨あとの緋の立葵

大島翠木

五体もつ窪みシャガール展いでて
花沙羅の二本しんかんたる真昼
佛頭を過りて来たかなめくじり
大海亀裏がへる眼の淋しさは
曼荼羅華鬘の遥かは街の灯ぞ

雨村敏子

炎天の鏡に影のなかりけり
砂浜を素足で歩く吾も鳥も
遠き日の風吹いている甜瓜
ほうたるやかかつて汀に人葬ふる
群れてゐて螢は音をたてずとぶ

小形さとる

善きことも水争ひもせずをる
問題は何かひとつ無い生ビール
薄ごろも生死を斜はすにしたりけり
皮を脱ぐ蛇の難儀を思ひをり
淋よしうて好き日なりける瓜膾

本多俊子

熱帯魚イエスの影をひきてをり
炎帝を背負ふ力のありにけり
シヤガールの顔逆さまに星涼し
一本の鉛筆重し広島忌
天の原庭三石も夏の景

久津見風牛

右脳も右耳も遠し白地着て
帳尻を合はすに墓石洗ひをり
金箔に賺されてゐる藪蚊かな
うなぎ背片手静かになでてをり
九頭竜に月影重き出水かな

近藤 きくえ

落つる滝翡翠の水に溶けぬたり
ご来光あまた染めつつ影生るる
外つ国に甘き西瓜をせりせりと
人形かともまがふ衛兵玉の汗
マンゴアの匂ふ夜市に紛れをり

近藤 喜子

日盛りのこの世の角を曲りけり
ぼつつりと真昼の底の水中花
角笛の聞こえてくるか大夏野
墨蹟を食べ残したる雲母虫
雪溪に億万の光の粒子

谷村 幸子

樹齡千の桂をゆする青葉風
欄宜の来て手を洗ひをり雪加鳴く
薄端に蒲の穂いけてかしこまる
夏萩の群れあちこちに鷹ヶ峰
鍬入れて土生きかへる土用かな



槐市集

岩下芳子

河馬の名のバシャンとチャポン夏の雲
緑蔭の午後の光のゆらぎかな
まなこ二つ空を見てゐる昼寝ざめ
土佐や阿波片手の中の南瓜かな
杏李食うべ北京へ発ちにけり

岩月優美子

七月の峽に湧き立つ靈気かな
佳き夢を見てをり星の涼しさに
渦潮の真上を歩く盛夏かな
この先は陽性に生き浮いて来い
草を食む虹の中なる羊かな

大山里

石段の不揃ひ竹は皮を脱ぎ
其処らじゆう楊梅落ちて山の臍
泪目やアスファルト沸き田水沸く
夏霞島持ち上げてゐたりけり
旧道はほどよき昏さ慈悲心鳥

金澤明子

初盆や京沈香を先づ焚かむ
僧頭巾金縫箔の麻の袈裟
青時雨形見の三味の音締めかな
庭埋める土黒々と半夏生
南北の地震の報あり五月闇



槐集

高橋将夫選

水無月の彩^{いろ}移りゆく棚田かな 京都 竹中 一花

すれ違ふ度に傾く日傘かな

炎天の京にお帰り囃子かな

菓子皿を置きて涼しき机かな
お帰り囃子―祇園祭の宵が町に帰る時の囃子

嬰の髪洗ふ盥や金の星

地の奥の火色のトマト挽ぎにける 枚方 中野 京子

水底の己の影や茄子の紺

青柿の日々に日色をためてをり

向日葵につつまれてゐる平家^{ひらや}かな

人の世は泰山木の花の下

巴里祭の裏側にある血の匂ひ 岡崎 岩月優美子

ゴッホの影探す向日葵畑の中

シヤガールの絵より飛び出す詩涼し

閃きの一瞬消ゆる走馬燈

わだかまり一つ溶けゆく水中花

炎帝や人なき白き道の果て 安城 近藤 公子

精霊の舞踏会なり螢かな

水打つて重心下げてをりにけり

はたた神去りたる後の樹々の艶

三日月に引つ懸けたくて縄ばしご

鼻とんでプラチナのこ糸落としけり 奈良 瀬川 公馨

女房のしたたかなりき夏落葉

蜘蛛の囀のぐるり夕日の紅蓮かな

空部屋アリ絵びら螢袋かな

一匙のプリン掬ふや夏の唄

夏の川砂白じらとながれ橋 枚方 近藤 紀子

水の香をまどひ梅雨明け待つてをり

指にからむ萍人の記憶かな

青鬼灯炎しづかにゆれてをり

海紅豆の闇に溶けたる紅さかな

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

すれ違ふ度に傾く日傘かな 竹中 一花
すれ違う度に傾ける日傘。そのささやかな心遣いがほほえましい。「お前の方が避けよ」といわんばかりの人も中にはいるが。ちなみに、傘と箒は立てかけて、日傘は畳んだり、回す句をよく見かける。

青柿の日に日に日色をためてをり 中野 京子
日々生長して次第に黄色を帯びて行く青柿の喜びが伝わってくるようだ。

巴里祭の裏側にある血の匂ひ 岩月優美子
巴里祭はフランス革命記念日。華やかなパレードを思い浮かべながら、革命の血ぬられた歴史を思い返しているのであろう。

炎帝や人なき白き道の果て 近藤 公子
人影のない炎天下の真っ白な本道。かの世への道なのか。そこを今、一人の人が行く。

女房のしたたかなりき夏落葉 瀬川 公馨
常緑樹は落葉しながらも、しっかりとその緑を保っている。したたかと言えはしたたか。男はさしずめ黙々と散る枯木か。

指にからむ萍人の記憶かな 近藤 紀子
人の記憶は断片的で、多くは消えてゆく。でも、忘れた記憶ほど執拗につきまとい離れない。まるで、指にへばりつく萍のように。

マニキュアの色は茄子紺冷奴 中田 禎子
冷奴の白とマニキュアの色対比が鮮やか。

南斗六星の雫なりけり梅雨入穴 富松 寛子
南斗六星はいて座にある六つの星で、それらを結ぶと斗の形になる。鬱陶しい梅雨入りの穴に星の雫が降るメルヘン。

山城の國の賛歌や夏雲雀 谷岡 尚美
夏雲雀に春の揚雲雀のような華やかさはないが、それだけに山城の國ならではの趣が感じられる。

告解の扉にイむや羽抜鳥 西村 純太
告解は洗礼を受けた後に犯した罪を司祭に明かす、ゆるしの秘跡。この羽抜鳥、告解を躊躇しているのであろうか。

鮎を釣りながら女を見てゐたる 柳川 晋
鮎釣りがどんなに好きでも、美女となると話は別という。鮎釣りがどうかは別として、誰にでも思い当たる節がありそう。

蟻の列力士の墓を真つふたつ 大山 里
長い蟻の列が墓石を真つ二つにした切り口のように。蟻は小さいが、力士の墓だけに重量感のある一句。